

児童・生徒の読書における性差に関する研究 —社会調査データに基づく分析—

泉 結依子

社会的に子どもの読書が問題になり、読書推進活動における課題も指摘されている。本研究では、読書活動について注目されている児童・生徒の読書行為や読み物について男女別に分析して読書における男女差の実態を明らかにし、性別の違いが読書のどのような部分に影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

これまでの研究でメディアの利用実態について性差が明らかになっている。高視聴率を取るドラマは女性を意識した作品制作をしており、実際に高視聴率のドラマは女性の支持があったからだと言われている。ソーシャルメディアも男性より女性の方が密接な関係にあり、女性のソーシャルメディア利用を使用したイベントなども企画されている。このような男女差は読書の社会的実態においても見られる。これまでもひとの読書行為についての研究は行われており、年齢による読書に対する概念や感情の違いを検討した研究や、読書を促進する行動についての研究がある。しかし、読書に関する社会調査のデータを使用して男女における読書の相違を実証的に明らかにし、読書と男女差の関係を明らかにすることを目的とした研究は見当たらなかった。

調査については①読書に関する直近の社会調査のデータを用いて読書行為と読み物における性差の現状を明らかにする調査、②そこで見出された違いについて過去からの推移を明らかにする調査の2つの調査を行った。①では「読書世論調査」、「学校読書調査」という読書に関する社会調査と「国民生活時間調査」、「放課後の生活時間調査」といった生活時間に関する調査を使用し、読書にまつわる行動とその他の行動を総合的に分析し、読書時間や読書時間といった読書行動や読み物の現状の男女差を明らかにしている。②では「学校読書調査」を使用し、①で違いが見られた生徒・児童の読み物について、1990年代以降の20年間にわたってどのような特徴があるのか分析している。主に読み物のメディアミックス状況について詳しく調査した。

本研究の調査から、児童・生徒の読書冊数や読書時間に見られる男女差、読み物における男女差について、社会調査データを用いた分析に基づきつつ考察を行っている。とりわけ読み物の傾向では、中学生と高校生では男女いずれもメディアミックスの影響をより強く受けているが、その内容にはそれぞれに特徴があることも指摘される。本研究での分析では、読書冊数や読書時間における男女差は、小学生における女子児童の優位が、中学・高校とより高学年における女子の読書冊数や読書時間の減少に伴って男女で大きな差がなくなることが指摘されるほか、児童・生徒における性別やその意識が読み物の内容に顕著な影響を及ぼしていることが示唆される。

(指導教員 原 淳之)